

## マタイによる福音書 21:23-27

還暦を迎え、様々な方からお祝いの言葉をいただきましたが、ただ、赤いちゃんちゃんこは着ることはありませんでした。ところで、還暦に着るちゃんちゃんこは、どうして赤でなければいけないのでしょうか。それは、赤には、古来、魔除けの意味があるからです。つまり、暦が一巡りし、もう一度生き直すための魔除け、願掛けということでもあります。しかし、私たちキリスト者には、そういう意味での魔除けも願掛けも無縁です。主が共にいまし、私たちのことを御国まで守り導いてくださっているわけですから、その必要はないということです。しかし、私たちは世と隔絶して生きているわけではありません。そのような習慣を大事にしている人たちとも共に暮らし、互いに互いを尊重し合いながら毎日を生きているわけです。つまりは、教会の人たちだけが私たちにとっての近い人ではないということです。ですから、場合によっては、「いかがでしょうか」と、そんな風に勧められることもあるのでしょうか。そんなとき、皆さんならどうされるのでしょうか。その場合、二つ、選択肢があると思います。一つは、信仰を理由にお断りするということです。強い言い方をすれば、拒絶するということです。そして、もう一つは、これはパウロも言っていることですが、私たちにとってはまったく意味がないことなわけですから、いずれにせよ信仰的には何の影響もありません。ですから、厚意は厚意として受け止めて、後は感謝してお任せする、そういう選択肢もありうるということです。ただ、そこで問題になってくるのは、どういう人がそれを言うのかということです。

牧師が信仰的に不適切なことを勧めることは先ずありえませんが、信仰的な事柄として、もし牧師のような立場の人間が皆さんに「こうしませんか」と勧めてきたらどうでしょう。皆さんは、その意見を素直に受け入れるのでしょうか。経験的に申し上げるなら、恐らくは、はい分かりましたと言うわけには行かないように思うのです。私の場合ですと、その理由の一つに私の権威なさを上げることができるといえるでしょう。なぜなら、それが証拠に私が言ってもなか

なか了承いただけないことも、他の偉い先生方が言ったら素直に受け入れるということがあるからです。では、そういう中で、一番聞いてくれない人とはどういう人でしょうか。それは家族です。すぐ近くで長い時間を共にしている人たちの言葉、身近な人たちの「こうした方がいいよ」というその言葉は、私たちはなかなか素直に受け入れることができないのです。それは、その人のことをよく知っているからです。世の中の人には分からないことも、家族となれば、その人の別な姿を見て聞いて知っているのです。だから、はい分かりましたというわけにはなかなか行かない。従って、私の言うことをすぐに聞いていただけないのは、その権威のなさもさることながら、それ以上に、人間的な近さにその理由があると思うのです。

ということなわけですから、祭司長、長老たちが「何の権威でこのようなことをしているのか。誰がその権威を与えたのか」と言っているのは、イエス様との宗教的な近さ、あるいは、同族意識、または、イエス様への関心の高さが、彼らをしてイエス様にこのように言わしめているとも言えるのでしょうか。ただ、そこで権威、権限というところを持ち出しているところに、問題の複雑さが現されているようにも思うのです。それは、イエス様を卑下する気持ちと拒絶する気持ちが、もしかした、認めたいと思う気持ちまでが、ない交ぜになって現されているように思えるからです。そこに現されているものは、いわゆる、近親憎悪といったものとも言えるのでしょうか。それは、イエス様のその力を認めつつも、でも、認めない、認めたくもない、認めてなんてやるもんか、そういう彼らの卑しい心根が現されていると思えるからです。まただからなのでしょう。イエス様がはぐらかすような返答をなさっているのは。

しかし、売り言葉に買い言葉のように、イエス様が彼らのことを拒んだわけではないと思うのです。それは、彼らの問いかけに対して、私にはイエス様が真っ正面から答えているように見えるからです。そして、その一つがイエス様が彼らのその質問

に対して二つの選択肢を与えているということ。なぜなら、分けの分からない状況に置かれた時、人が頼りにし、またするものはなんでしょう。その一つが「権威」というものでもありますが、それゆえ、祭司長、長老たちもまた、むやみに権威、権限ということを持ちだしているわけではないように思うのです。彼らが権威ということを持ち出し、イエス様に問いかけているのは、彼ら自身が分けの分からない状況に置かれていたからで、その原因となったものがイエス様でありました。ただ、分からないがゆえにまた、イエス様に対する彼らの気持ちには屈折したものが現れ出ることもありました。イエス様がはぐらかしているような印象を与えるのは、それが際立っているからであり、まただから、争いを意図的に避けようとしたのでしよう。

このように、ここでの出来事は一見するだけですと、ユダヤ教指導者のとがった部分とイエス様の丸く収めようとするところばかりが目立っているため、どっちつかずの印象を与えることにもなるのですが、ここで語られていることの内容をもう少しよく見ていくなら、そういった印象は拭い去ることができるのでしよう。では、そのために私たちはどうすればいいのか。そこで必要になってくることは、彼らがここで持ち出している「権威」という言葉に引きずられないことです。それは、私も含め、現代人の多くがこの権威という言葉があまり好きではないからです。好きではないから、そこに嫌いという自分の気持ちをかぶせすぎて、ここで言わんとしていることを分け分からなくさせてしまうのです。ですから、そういう点で考えるなら、自分の気持ちに溺れる私たちと、感情に流される彼らとは同じところに立っているということにもなるのでしよう。

彼らは、イエス様との近さゆえに、いや、近づきすぎたがゆえにイエス様のことが分からなくなったのです。ですから、彼らが語るに落ちるかのよう「分からない」と言っていることは、計算づくで、というだけではなかったと思います。もちろん、御言葉が彼らの迷いをはっきり記しているわけですから、彼らの視点に立てば、「分からない」と言ったその言葉は彼らの本心ではありません。しかし、私たちの見るべきところは、彼らが見ていたところ、見ようとしていたところではなく、私たちの見

るべきところは、イエス様が彼らのことをこのときどのように見ているのかということなのです。

そうであれば、イエス様の「それなら、何の権威でこのようなことをするのか、私も言うまい」とあるこの最後の言葉を、私たちはどのように受け止めればいいのか。その言葉尻だけをつかまえるなら、それは、彼らに対するイエス様の拒絶であるとしか思えません。しかし、彼らを拒絶する気持ちがイエス様をしてこう言わしめているのでしょうか。むしろ、そうしたものはまったく逆なのではないのでしょうか。なぜなら、彼らの質問に対してイエス様が二つの選択肢を与え、しかも、彼らに対するイエス様の質問は彼らの問いかけにとってはその本質を突くものでもあったからです。このように、彼らの話をしっかりと聞いて対応されたのがイエス様であったのです。つまりは、彼らのごちゃごちゃで定まらない視点をイエス様が整理してあげたのがイエス様であり、従って、そういう意味で、イエス様は彼らのことを拒絶したわけではありません。むしろ受け入れようとしている、それが私たちのイエス様であったのです。

ですから、ここでのことを、私たちがもし、イエス様の際立った能力ゆえに意地悪な彼らに打ち勝ったと、さすが神様の独り子イエス様だと、そう結論づけるだけだとしたら、それこそが彼らと私たちとが同じ視点に立っているということにもなるのでしよう。けれども、イエス様はそうではなかった、なぜなら、その証拠に、イエス様は彼らを打ち負かそうとはなさらなかったからです。イエス様のなさったことは、彼らに選択肢を与えることであり、考えさせることであつたのです。ですから、そこには、当然のことですが、イエス様の愛が現されています。イエス様はかつてその山上の説教の中で語ったように、自らに悪意をもって挑んでくる者をも敵とは見なさず、愛そうとされたのです。そして、それが私たちのイエス様であるのです。それは、御言葉が山上の説教のその最後のところで「イエスがこれらの言葉を語り終えられると、群衆はその教えに非常に驚いた。彼らの律法学者のようにではなく、権威あるものとしてお教えになったからである」とこう語っているように、ここで彼らが問題にしていることがイエス様の権威というものであるなら、なおのこと、この自ら語った

ことに対しては誠実であろうとしたのです。

それゆえ、そこから分かることはいろいろあると思います。先ずは、イエス様は二枚舌を弄するお方ではないということです。それは、私たちに福音をもたらし、福音に生きたお方がイエス様であるからです。従って、福音に生きるということは、相手を追い詰め、その逃げ道を塞ぎ、勝った勝ったと喜ぶことではではありません。この箇所から分かるところは、逃げ道を塞がずに、進むべき道をはっきりと示すということなのです。つまりは、救われる余地、救いの可能性を残し、人と接するのが福音に生きる者のあるべき姿だということです。それゆえ、私たちが福音に生きる中で迷い、そこで正しい道を見出したいと思うなら、その選択肢は「天からのものか、それとも、人からのものか」、この二つに一つを選ぶということでもあるのでしょう。しかし、そこで私たちが福音に生かされていることがはっきり分かっているなら、選ぶべき道は一つです。それは、天からのもの、つまり、神様の御心ということであり、それゆえイエス様に倣う者とされる、それが私たちにとっての愛に生きるということでもあるのです。つまりは、あれかこれか、そのどちらを選ぼうか、ということではなく、これだけ、これしかない、ということです。ところが、そのいずれをも選ぶことができなかったのが祭司長、長老たちでありました。

それは、彼らが見ていたもの、見ようとしていたものが神様ではなく、自分の心の内にあるもの、つまりは、自分の気持ちや考え、そこからはじき出された損得感情、彼らの考えていることはそういうものでしかなかったのです。そして、それを明らかにしているのが彼らの「分からない」というこの一言です。ですから、こうして御言葉に聞いている私たちのこの日の課題は、イエス様がここで仰っていることの意味が「分かる」ようになることです。そして、この「分かる」ということですが、それは、分かりたいとぼんやり思うことではありません。また、分かろう分かろうとあくせくすることでもありません。私たちに求められていることはそういう曖昧なものではなく、はっきりと「分かる」ことなのです。では、どうすれば、私たちはイエス様の仰ることを「分かる」ことができるのでしょうか。そこで大事になってくるのは、イエス

様が「ヨハネの洗礼はどこからのものだったか」と仰ったこの一言です。つまり、「天のものか、それとも、人からのものか」という問いかけは、二の次三の次だということです。それゆえ、イエス様が最後のところで「私も言うまい」と仰っていることは、イエス様が意地悪く、そんなことを言っているわけではありません。繰り返しになりますが、考えさせようとしてのことであり、そして、考えるということは、まだその答えが見えないわけですから、悩むことであり、迷うことであり、深い暗闇の中を漂うことでもあるのです。そして、それがヨハネの洗礼に思いを馳せるということだからです。

今朝の新聞のあるコラムに「人間が何かを学ぶ場合には、そのベース、土台となるものが必要だ」との言語心理行動学者の言葉がありました。イエス様がここで仰っている「ヨハネの洗礼」とは、私たちが「分かる」ためのベース、土台となるものだと思います。ですから、イエス様と彼らとの間で交わされたことは、それゆえ禅問答のようなものではありません。瞑想にふけり、悟りを開くためのものではなく、もっと具体的で現実的なものなのです。それは、ヨハネの洗礼というものが、イエス様の十字架という次を備えるものであったからです。だから、私たちは、十字架による赦しゆえにその先に進み、神の御前へと進み行くことが出来るのです。けれども、一足飛びに欲しいものを手にできるわけではありません。そのために私たちに求められることがヨハネの洗礼を見つめつつ、十字架へと進み、その前で佇むことなのです。

ヨハネの洗礼を心に留めるということは、十字架の前にたたずむことであり、それだけしか出来ないことでもあるのです。そして、この経験が私たちには必要なことなのです。それは、途方に暮れ、道に迷い、自分ではどうすることも出来ないところに実際に立つことでしか、求める答えは与えられないからです。それゆえ、そういう意味で言えば、ユダヤ教指導者たちは、自ら発した問いかけによって絶望しなければならなかったはずなのです。ところが、彼らはそうではなかった。だから、イエス様も私も答えないと仰ったのです。つまり、イエス様は、もっともって考えろ、悩み、絶望せよとこう仰りたかったということなのです。それは、それが、彼らが本来大事にしているもの、これまで大事にして

きたもの、そして、これからも大事にしなければならぬものなのであり、それをイエス様はもっと大事にせよと、こう仰りたかったのです。

そこで、この直前の御言葉を思い出して頂きたいのですが、そこで皆さんに申し上げたことは、深き淵に立つということでした。そして、それについて端的に語ってくれているのが詩編 130 編の御言葉です。少し長いのですが、お読みします。「深い淵の底から、主よ、あなたを呼びます。主よ、この声を聞き取ってください。嘆き祈るわたしの声に耳を傾けてください。主よ、あなたが罪をすべて心に留められるなら主よ、誰が耐ええましよう。しかし、赦しはあなたのもとにあり、人はあなたを畏れ敬うのです。わたしは主に望みをおきわたしの魂は望みをおき 御言葉を待ち望みます。わたしの魂は主を待ち望みます。見張りが朝を待つにもまして 見張りが朝を待つにもまして。イスラエルよ、主を待ち望め。慈しみは主のもとに 豊かな贖いも主のもとに。主は、イスラエルをすべての罪から贖ってください。」と、詩篇 130 編の御言葉はこのようにイスラエルの人々が大事にしてきたものについて語るのです。それは、そこで語られているものがディアスポラのユダヤ人のアイデンティティを、つまり、ユダヤの民がユダヤの民であるとの自覚を養う、イスラエルが経験したものであるからです。

それゆえ、信仰とは、つまりは、神様への信頼とは、この深き淵にたたくばこそ養われるものでもあるのです。そして、彼らがここで言っているところの權威とは、ここに立って初めて見えてくるものでもあり、神殿の奥に鎮座まします中で見えてくるものではありません。従って、それは、誰かに聞いてすぐに分かるようなものではなく、実際に、そこにたたくみ、実際に絶望を味わい、そこでつかみ取る以外他に方法はないのです。そして、そのために与えられたものが、イエス様がここで「ヨハネの洗礼」と言っているものであり、ですから、彼らがそのいずれをも選ぶことができず、分からないと言い逃れをしているところに、彼らの罪深さが際立つことになったのです。けれども、だから、自力でつかみ取らなければならないということではありません。詩編 130 編にあるように、御言葉を待ち望み、主を待ち望む中で必ず与えられるもの、それが私たちすべてが求めている

ものであり、そして、それが私たちには実際に与えられているのです。

そこで、そんな私たちの信仰についてある作家が語った言葉を最後にお伝えしたいのですが、それは次のようなものでもありました。「もしキリスト教が、我々のでっち上げたものであるならば、無論、我々はこれをもっと平易なものにすることができのだから。だが、キリスト教はそんなものではない。平易さという点では、我々は、新興宗教を発明する人たちに対抗することはできない。いや、できるわけがない。我々は事実と取り組んでいるのだから、事実を頭を悩ませないでいいのなら、むろん、いくらでも単純化できるはずである」とある作家がこう言っているのですが、このように私たちが頭を悩まされるこの事実こそがヨハネの洗礼とその後に続くイエス様の十字架と復活の出来事でもあるのです。そして、この経験をしたのが、先週、愛する姉妹を御国へとお送りすることになった私たちでもありました。

この愛する者の死は私たちを深い、本当に深い淵に立たしめるものでもありました。けれども、そこに立って、私たちは、十字架のイエス様がその私たち共にあることを知らされ、その慰めと平安に与ることが許されたのです。つまり、私たちにとって「分かる」ということは、この経験を積み重ねて行く中で与えられるものでもあるのです。まただから、一つ一つ積み重ね、最後に感謝をもって御国へと凱旋することとなる、その一人が愛する姉妹でもありました。ですから、私たちの信仰の本当の意味での豊かさとは、また、その力とは、イエス様と共にあることを知らしめる、この十字架の経験を通して現されるものであり、まただから、その姉妹は、私たちにその愛唱聖句でもある「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそがキリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです」というこの御言葉を私たちに残し、召されて行かれたのです。それゆえ、私たちは、イエス様と共に、また、愛するすべての人々と共に、深い淵に立ちつつ、喜び、祈り、感謝の日々を歩むことができるのです。祈りましょう。